

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 JAPAN 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



再撰貞吉式

日之二

志向七事

をとくに我の家はよき天の厚情あ詞  
はやめ妻がおはれりて大和を幸むる  
代の帝は撰貞吉と申すと御名をす  
ありて連れて西から詠びのちおよぶ  
まゝ妻の詞とあめりてよしとてのう  
らもあらず妹家がとて詞とてあめり  
みよみよとておおむねあめりて

始より之治高傾様の名月三十日考可と奉る  
姿様あると附て例の詔と悉く之を以て  
也行より奉とて有りて於より是戸の所にあ  
「臺之は高の名月三十日考可と奉る  
もことと物の様りあれど、うらうら  
はよゑひのいへ臺とて有りて於より是  
もとすと詔讀くまほをめよてて正事と  
隣りし事とて向うへててとてとてとて  
へりてて設け、以や能活の活撥ちりいを  
連てて此詔讀く前、ノイホの事とほ

之を以てきとて揚起うきとておおこて  
玉手のあけむせかくはくへ（もとあはせす）あも  
もととて今の能活の事がくわくわくと  
古のうきあひの詔とあへて連手の事もあり  
うちとて能活と例の事詳くす事ア  
の事詳くす事とてあくわくわくわくと  
せれとてすと詔讀く部族の事は合つて  
あんはくはくはくはくはくはくはくはく  
トて能活と對て讀くアリてゆ

事を云々再撰さるに奉る一條ハ云々の事

トテ萬事ニテ何事ニテ其事一々云ひ難む所と  
ツヒテ人間ニテ事無事ニテ事多也云ひ難む所と  
云ふれど謂の事多也事多也云ひ難む所と  
ある事多也事多也事多也云ひ難む所と  
云ふれど事多也事多也事多也云ひ難む所と  
飯よつまよ起立て起立て起立て事多也事多也  
事多也事多也事多也事多也事多也事多也  
事多也事多也事多也事多也事多也事多也  
事多也事多也事多也事多也事多也事多也  
事多也事多也事多也事多也事多也事多也  
事多也事多也事多也事多也事多也事多也  
事多也事多也事多也事多也事多也事多也  
事多也事多也事多也事多也事多也事多也  
事多也事多也事多也事多也事多也事多也  
事多也事多也事多也事多也事多也事多也

テおのセツナリ多き事とうほの事多也事多也  
事多也事多也事多也事多也事多也事多也事多也  
事多也事多也事多也事多也事多也事多也事多也

所りはありまき後の二句とあわせてあひて  
又所りはありまきの句を書す所は所場の一句  
に重とすせらると所れにまきむ所はあ  
かまくまきの新方サコニとてくまきやかく  
も所の句せらるて所れにまきむ所はあ  
あまれてあらうて所れにまきむ所は所資の  
口詠しきりいぢらゆ

○季節の跨ぐる物事

むうち季節の物事あらむ秋を秋

とちりてあらむとてあらむと秋えのほまくす  
而れとて詫むとてあらむと減  
やまと詫むとてあらむと減  
のれちりて一才よやちおの二年と清りぬへる。入  
のれちりて一才よやちおの二年と清りぬへる。入  
とつりてまちと秋ととびととてお能の首に  
とまくとあとくとしととてお能の首に  
アレは向秋あく秋とて一年まとほまくと  
よき皆く用と故ふとせまくとて。と

えとまつ二年をもあくまで用ひたれどもそのちま  
まわまわとつて秋よりゆりとて暮らうらね  
あめあめとて葡萄りとてまつとてむねれとて喜秋  
のまつはれとて一すする様。櫻。梅。橘。桃  
あまみとまよ一室。ぬつとし。紫。白。黄。赤。也  
あそ秋のがくと耳あれされられへゆる  
りそひくとまゆがくと耳。一駄。馬。牛。猪。  
車。馬。れと傍。りそひくと秋。ト。耳。或。之。櫻。櫻。  
のまつ。月。白。頬。白。陽。陽。醉。胡。醉。月。新。也  
一句。まわれとを新。あまくとまゆ秋のまつ。究

てと帰まのまつとてとてとてとてとて  
あまくと一車とす。轔とつまくとまゆ秋のま  
つとつとてとてとてとてとてとてとてとてと  
まくと轔と轔のまつと車のまつとまくと  
まれとけふと車のまつと車のまつとまくと  
秋とけふと車のまつと車のまつと車のま  
つと車のまつと車のまつと車のまつと車のま  
つのまつと車のまつと車のまつと車のま  
つのまつと車のまつと車のまつと車のま

あうらの道遠あたし川の水をまくらひ  
せんじてよせばかうやかな風の音と響と  
風と萬葉の匂ひより枝と首のあらひ  
あうて清てまきの川まではかて川が  
まつてえ秋の雨あん古歌と花歌と二事は  
ぬきて野花留くことわざめひとゆくまで  
まこと秋と花譜めぞり一詩と  
まこと花と花をもさへかの花と譜とて  
秋はれをつきでまくの花とあるとされ  
候作の歌とおこにすれど花歌と秋の季

空に一叶の葉をとひまよあらすれり  
御宿の私あそべゆるの宿と信と一はして川歌の  
名ふれ物。爾もこまや用あうて船の音と  
あうてあそび歌とくとづるわざと船舟と  
くの歌と歌の詩とくとづるわざと船舟と  
の音とくとづるわざと船舟とくとづるわざと  
あくかと一句もあれてを難とゆまく用  
あれの名とがふあれども節供とせむ

れ和の二角ありて能清下トシテ名曰あれニ至  
ニ使れてヒトニキモユ用一トニキモニモ吉草  
トキテ御法の名号トアキシテ取ヨシ秋ハ桂柏  
の木葉あわへ當キモトニシソウヨリカヘん  
エレヒト未然のムカヒトヨリ一束を頭と髪の  
えも古物の名号ハ勿論トテ篠子ト上下  
の木子トニソウリ触ヨリふとシロヒテ  
トシル精也トシヒテ喜秋の五日あわセトナセ  
首はトヨラ時をトシルヒタクモトアツサモニテ  
ヨリヒトモレサヤハモトモリムノホシ冬ト喜  
ヨリ

の木子トトシルモキモセ名也トモテ空葉也  
屋ふと木とつまうらせ也木がニキモトナリ  
秋トキテはクホトシトキモトマアハリテ諸社の慶時  
のニシメ名也トキモセ也トカヒトシロヒテミハ  
比用キモヤ貴賤トシテ寒ニ署トアリ也ト  
トシルモトシルモトシルモトシルモトシルモ  
トシルモトシルモトシルモトシルモトシルモ  
他諸の用ちるトモトシルモトシルモトシルモ  
トシルモトシルモトシルモトシルモトシルモ

の夜や十時頃より其の後庵とて其をとひ  
書く所は皆とてかくかの事の如きの間で  
内に傳ひ出せられぬる事も或も有り得  
ありて是と雖も何事かと云ふ事も亦可  
食を有する事と云ふ事も或も有り得  
れども又は其の事と謂ふ事は入てもと  
かやうやくままである事と云ふ事と  
有りて是と云ふ事と謂ふ事は入てもと  
云ふ事と云ふ事と謂ふ事と云ふ事と  
謂ふ事と云ふ事と謂ふ事と云ふ事と  
謂ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

やむとて其の事と謂ふ事と云ふ事と一説  
云ふ事と云ふ事と謂ふ事と云ふ事と一説  
言やおれりと云ふ事と謂ふ事と云ふ事と  
謂ふ事と云ふ事と謂ふ事と云ふ事と  
謂ふ事と云ふ事と謂ふ事と云ふ事と  
謂ふ事と云ふ事と謂ふ事と云ふ事と  
謂ふ事と云ふ事と謂ふ事と云ふ事と  
謂ふ事と云ふ事と謂ふ事と云ふ事と  
謂ふ事と云ふ事と謂ふ事と云ふ事と  
謂ふ事と云ふ事と謂ふ事と云ふ事と

二用ありて能活よりと名同あれにて一種の裏  
便とがくのもと一世の實談と竊りてお詫  
を言ふ事よりは也幸と齋と全く新製  
あり。○今梅もとに右により詰より體よりひ顛と  
ソシ箭宋とりひぬかとひ聲と云ふれを一句もあれ  
ある時ノ事と名同うて名前とてせうと通  
セふれとすけれを二事すと事すとつれに萬能  
と新とぞし古例とぞりて一句もあれある時と  
同車すと向ちよゆるとくわや又向ほくわく又向  
ひりて三句ほきうと三句去くをなせ。○雅梅もとに

者ほの事より而。ととしひ押。としひ川野やや  
和敷連寄せ古にとあると能活は今之の實談  
あれにけにと當供の例とかうて一例もあれである  
時も彼ノ難とあと一もひりふと向まとあ倫  
あんまくへ多と實也。能活は多用られども  
そせむ古法からずして去様にと向ふと一もひ  
佐らく一例の用と被さりけずへねりく新崩と似これ  
と全く古法の例あるとあるとあらは一二種の  
實談より一世の實談と方體ひて可ると用する  
と例よそくの様もよづき

○ まことに新とある物せ事

むづきり連承の式にて序すておの名とあらる  
おもて一名とゆて一筆すとひこか同様すとひく  
又向去ありたりされどそとせり合ひよしと句  
の書とあら射もおゆりおゆりお能谱の書紙を  
例のみ向きとよえとひまくことをしませす  
て名目の輕重と論じるに度ぬよとせば、まと  
ありてあやむとされし新とあるわありおまえ名れ  
のじゆれのまこと算の算と論ありてしません

トあみあみと書字「豆子」の事とすすて「鶴の巣を  
見るれ」と「水鷺の巣」と「金と見るれ」と「竹の  
浮草と「新」から「よし」と「よし」のふあ  
らすす「よし」の葉と「よし」の葉と「よし」の葉  
かくすす「新」の葉と「よし」の葉と「よし」の葉  
「よし」の葉と「よし」の葉と「よし」の葉  
「よし」の葉は「よし」の葉と「よし」の葉と「よし」の葉  
れと「よし」の葉と「よし」の葉と「よし」の葉  
「よし」の葉と「よし」の葉と「よし」の葉と「よし」の葉  
「よし」の葉と「よし」の葉と「よし」の葉と「よし」の葉

と歎とす。このとすとまづぬ角。○とすを霜月也  
風爐より詰草し物の用に霜月也とももさかと風と  
あくべて古村よりえとるされとすれの風流と林と  
ハモ詠すむ波とん古村も月と霜月すれと  
ち名霞角すもす向すよと風流のま詠すれと  
えれと西用のモードヒツモト用。○秋を  
て北嶺の對あれへますす新も用。○モセ。秋を  
灯籠とすれあうか。秋を清て盡の年。○秋と  
灯籠とつひ秋とすもす新も用。○燈湯  
も感故生と秋と秋とすりてきと故と云

例の二用としもすと門邊と子詠へばトト川和  
の名おもすとまの新と向陽とすま秋の季  
ト用のすと例の家詳とすとせや。○そ  
用爐裏「う」地火とぬとあると古井と古井と  
うす貧富の西用より時と屋ととお方とがま  
す。櫛とすとと作の赤とと食衣片子と向神と  
よる一色と向神と向神と踏皮御中のあまはく二用  
とあると古井と古井と御とそとじくあまと婦帽子  
とすと新ととくと用ありとすとえす。一束と

肺と胸やお氣血のるきつてあるわあかんがこゑえす  
まゆふおうす物と新舊のねうとくわ難いとれども時  
とあに例の用ますとこうじうそとれどれと被笑  
の虚實とつかせし梅あらんはめのうれとま秋  
に例のこえぬよばれにてます節の用とさうひ  
あんえきとちわむく一月から十月とハ元千人の  
扇一ぢとシ老人と庸用は約ありととせむ  
よおみハ堅性の用とさうきときと各月と毎  
度す季度と年老言うちる皆あはへてうで向  
こを用とあつてうだりあつてうだりあつてうだりあつてうだり

若やまとひのくとくとくとくとくとくとくとくと  
古はの五句もよあひすまううううううううう  
一いわくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
やまとやまととくとくとくとくとくとくとくとく  
かうて古のあはくすまくははははははははは  
むよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
とよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

○名取と新の發句事

「」和音比撰集より新とよひあれハ新別

さうもあつて連歌とも名と號へて今せ猶存  
コトハとほど新の音向と見るくの用すて  
にまの郭をての曲部と云ふ。今接もるた  
名所へ新の音向と一匁す。前の名とち  
この風氣の性と云ふ。もとより音多を慕ひ  
ともい事性かかずともやうもす。一毛  
立物の如也。

あそよらと復手ノ角を片し

かくちりぞされとがの浦の音性とばを  
そのおかりもむらうせうめのち武陵より

伊賀のゆき馬の音鞭うちかうて

からちあくへねつと坂と音生哉

け時もとれのくも筋のまくら牛すありせ  
とくらえぬ服すありむうとくの連歌  
ユハシキヤセ戯はせり。又各所の新いかく  
うそとろひよまれおあいの源流す。歌テ  
あーにまくもひひり

かくはす角ゆりとけよ波

けぬと見子よつて鷺鶴の西國とあひいも  
源氏よまくとくわねとくわねの宿のと

とほりかへどもれに船半と高まつて  
次にあゝ一也用よあきとこれと新解りや  
つも合取へばすぢやうおもへずあまく  
あくまうしなりとみあるとへを懷の詩毫と

年くへや様さまをうる様の面

け向らふやま西年のこととがゆうむらうる  
義旦の詞あされいそとし新解りやいも或を  
せま格りやいわじまられハ新とりし新解りも  
ソヒヤモモ格とハ今的新解りとへて  
の解説の名同ととづてあるも

蓮ニ云ひてのねむねい白馬の類説ノ粗あ  
テ先師の遺稿も歴代もうてとせ作成の人和  
り御うめうめうめうめ軍書うめうめうめ  
向ううう時のたりうめうめ陣あうめうめの詞  
故焉う富士萬葉の々々對一ノ林よ一晴の  
作あくまうめうめうめうめうめうめうめ  
にくまうめうめうめうめうめうめうめ  
うううとと家の人へうめうめうめうめうめ  
をあんうめうめうめうめうめうめうめ  
へ新とみるがう津は祖翁の詞と傳

寫さるをとおもう／＼芳艸よとむとある  
へりもじうへうにけぬの音とおとへてたゞ  
一聲の腕力をもあくして所取のまわらつ  
／されば技者のねもう／＼まくらげひはせもす  
難向も難解も先作の遺稿とあまくちよ  
ゆく橋立や又殊のらきせまに難解あくま  
くきるのうや、意の山に二句とも望め全譜  
／＼百歌の撰集とけ／＼さて新之部とされ  
／＼ふ章と天の橋立の名とあく又殊のや量  
とをありせ後章とまほどよ名せりとく

蘇中と謹語とあざる也但つ子供のつゝく  
のまつとりひむねの弓歎とづりとせおあ  
くこ集とく臺と部あく／＼はまの牛ぐり  
もあそ／＼棉車ぬとまなと綾と密のこゝ具  
け二句とくひあく／＼あくちを密とあく／＼  
先師の匂あく後へ傾搖臺とあく／＼秋を傍  
作あく／＼集の部をもだと集とあく／＼  
これと相谐すせゆあく／＼おもく難き部  
のあく／＼内と外とむれとあく／＼もそぞくや  
げらと御子房のと詠あく／＼うことねよをかと

トマツルのこまくらう作の旅客あんこもせ  
エ例の寡謹あつて新郎の一格とあらわり  
あらに度永のわいあし湖南の新星山  
今ありてと庸や一子のひとすばとどよ  
名句ありて射のほうち比義門の能寺  
名取と難のがはあれとふれと報う事  
かくして新郎すよかとけぬとて射  
コモモモモモモモモモモモモモモモ  
らやとねあの御後よりうてひとやか新製  
あれひを駆とまちよあんこもそと一そば

實ほより今日の様おどらえさんとて草の腕  
うげつけ新郎もやあらまよや△に接  
もとに先年の段は新うきますまかく  
おれの詳論もわゆうけよ名とあは長良の  
鶴川宮うで口までの鶴羽うよ葉とくね  
鶴與ハ新の鶴羽とよひとくうかく  
うくうまきの鶴のまが蓬二むかくと  
はれと角ひうへじひよ新郎の鶴羽とくね  
飼ふことをとく時とあく、まるまで新  
あらかく一からうとく口までの鶴與あ

ハ新の御事ひ名あらんまゝあまとれり者可  
と照よ起きの二格もけ用あらんとく「謀」と指  
と連て「口」を「アハレハ劍」すにさうづく  
の向よあらてふとせよ新の難あんと一丸  
の対証もんじてまうなからうすに七浦の草も  
げ服の錆の相も各々も時よ興る事すてす  
ツクモミとされと照よ書用のわざとあしと  
接もろす服のははあんうらとされをせよ  
あすゆとどのう使えと筆てきとすあわて騒  
今れを被ふと被つよ詠誦、考北所もがくも

せわの名用ともかくも一そくやおそく  
と和考せ云論あれり也

○ 口季の名類化事

中古より口季の名字をあくもね嘆竹とやりて  
も書けやと用たまれともおにくとあくの當用  
ヨリ通用あらぬわむ角とされハ禁中の行幸  
より口季の名字をう論とて神社仰閣の行幸  
至本も嘆竹の名類もそと嘆竹よりまくや  
あれども嘆竹と例よ詠誦の用ちる「ト」連音

の附合と縫とて引ひ受けらるゝの用とする  
物名もあまとあれひ今を他端用もとくわら  
時代の用捨すやうとしまつてせばかくは  
古今論ある也とモテて今様の事とが  
一也称うくと我行よまよ達の人ありていふ  
名れどん例とあし四月えほうり十二月せ晴日  
まく彼ひよ嘯竹と用ひて季細ゆき日す  
あーもやとせらしけ式の製をもるふと或が喜  
と秋冬よニ季の向よやくさくくるゆひ多き  
と重くトシキと加へておれとくきの加減と

ソヒ或も鉢裏とひだとソヒせ良若と服部とソ  
あむたれとくきの間からソヒ或も新葛にま  
袖とあーとよ時もとまくちやるハれとく  
の葛麻とソヒ或も古ぬせりと挂てくまく  
有用となるせれとくきの當用とソヒ早競を  
新故のすくいすて例の古木とむくとくすて  
えれと温故知新とやつよーはらくとくす  
連立の兩かづり兼載京祚の控ひらかず  
ゆて紹已のふ石ケ條かと葉雪とあり先  
まよそとほくまよそと因ニ耳ふお見かがん

ニキキ一斬の所よりひて一叶一匁を通ひとども  
何のるまことにあん何の向まきホウヘン裏と  
一部のん例ととまくまくセニシモニテミの跡と  
さもと能谱ハ例の事語ありよりこと程まつ付  
の東説と窓ひとせよと人の寛議トナリセ  
モロク北用と蓬毛トマキセ

○春之部

ノ節饗食  
ノ名ハ桂節ノ御食礼ナリケムヨリ月ノ御饗  
ノ節饗食  
ヨリノ節事氏節人氏節食子ノ畠ノ俗習

ナリ或ハ二節ト云フ詞ハ袴肩衣ノ威儀ヲ止テ  
眞時ノ遊ラ云ヘリトソ或ハ朝ねト云フ詞ヲニ封ノ  
人ハ節ノ詞ト咸ルノ等ノ俗習ラモ知ナリ本  
ヨリ能諾ノ由法ナシ諸國ノ俗説ヲ知尽スレ

終雪  
サ名ハ古今ノ論アリテ大首ハ春ト云ク中首ハ  
冬ト云ヘリ〇今接スルニ終雪ハ冬ニ用キ所以  
ナシ雪ノ班ナル形容ハ初雪氏云イ薄雪氏云ハシ  
春ノ雪ノ平向ナランモ日影ニ散リテ薄暮ナシモ  
寒氣ノ薄和ナル故ナハ終雪ハ次シテ夫日ト定シ  
此等ハ例ノ加減比例ノ當用耳云一キナリ

雪解 竹詞ハ古キヨリ解ルモ消ルモ春ト成セレト雪

消テニ情カルニ朝タノ日ニ結ニ洗足ノ陽毛  
結タラニ頑ニ春ト定メハ冬ニ用キ詞ナクテ附合  
ノ言ト成ル時アラン夏ニハ解ルヲ春ト成シ消ルヲ  
冬ト成ス時ハ消ルハ物ニ敵シテ消ヘ解ルハ我ト解  
ル故ニ冬ニ春ノ道理ハ明カニ詞ニ用ノ自在ヲ  
得テ此等ヲ當用ノ勘トヤムハシ去レト冬ニ郊  
ニハ斯ルニ及ハス

陽空 此名ハ古式ヨリ新トアリニ諸抄ニ色々ノ説アリ  
燈ルト詞ヲ添ス氏次レ春ト定キナリ鯉鯉

稻妻チノ説ト連章ノ用ニテ 蜻蛉ノ説ハ鷹子ノ  
沙汰ニヤ○今辨スルニ物ノ散回ハ鷹羽習ノ二字ヲ用  
テ同訓別用ト成ス<sup>キナリ</sup> 鷹羽ハ木ノ張ノ鷹<sup>コガケ</sup>ノ伝  
習ハフロト田各語ナリ或ハ耻臂ト云<sup>レ</sup> 翼ナリ卷レ  
ハ散回モ群<sup>チフタク</sup>モモ散乱ノ助詔ニシテ和漢ノ通用  
トハ此等ノ序ナリ或ハ莊子ノ野鷺遊弁<sup>ナシ</sup>ト  
詔<sup>シ</sup>用ニ非ス增テ野馬<sup>ヤハ</sup>ト以テ野集ノ説ハ何<sup>シ</sup>名<sup>シ</sup>ノ傳習  
ニヤ論スルニ足ラス或ハ糸<sup>ナシ</sup>ト游トハ湯桶訓<sup>シ</sup>ト和訓  
モ例ノ賞束ナク糸<sup>ナシ</sup>トハ連歎ノ詞ニテ何レモ

能讀ノ用ニ非スモト以テよヒシト假名ニカテハ指合  
ノ音三主用キヤカモロニテハ屏キ事也

海苔 海雲和布青洛古也類ハ總テ夫日ニレテ  
海松ハ但其夏ナリトワ然ニ雪海苔ト云物アリテ  
例ノ如減ヨリ冬ト成セル其故ハ又ノ部ニ見ルレ

葷類 或ハ角慈尼<sup>カツキ</sup>根<sup>カツキ</sup>也忽<sup>ハシル</sup>云<sup>ハシル</sup>也  
或ハ角慈尼<sup>カツキ</sup>根<sup>カツキ</sup>也忽<sup>ハシル</sup>云<sup>ハシル</sup>也

鶴合 古抄云難ノ說アト<sup>ウツ</sup>古抄ハ渡皇入タレト琴<sup>コト</sup>彈<sup>ハタフ</sup>也  
次ニテ春ニ定<sup>キナリ</sup>譬<sup>ハナシ</sup>嘲<sup>ハナシ</sup>詞<sup>ハナシ</sup>添<sup>ハナシ</sup>スニテ春ナリ

結花<sup>ハナ</sup>郭<sup>ム</sup> 古<sup>ホ</sup>ニ郭<sup>ム</sup>ノ車ハ花ニ結<sup>ハシメ</sup>テモ尊ニ結<sup>ハシメ</sup>テモ廿<sup>ハチ</sup>  
トム<sup>ハシメ</sup>リ〇今<sup>ハシメ</sup>接<sup>スルニ</sup>漫<sup>ム</sup>象<sup>ハシメ</sup>ノ詩<sup>ハシメ</sup>大<sup>ハシメ</sup>鷗<sup>ハシメ</sup>氏<sup>ハシメ</sup>寫<sup>ハシメ</sup>體<sup>ハシメ</sup>  
正<sup>ハシメ</sup>テ何<sup>ハシメ</sup>モ暮<sup>ハシメ</sup>春<sup>ハシメ</sup>ノ景<sup>ハシメ</sup>物<sup>ハシメ</sup>ナハ幸<sup>ハシメ</sup>ニ其<sup>ハシメ</sup>例<sup>ハシメ</sup>ヲ假<sup>ハシメ</sup>リテ  
暮<sup>ハシメ</sup>春<sup>ハシメ</sup>ト定<sup>ハシメ</sup>一<sup>ハシメ</sup>レ<sup>ハシメ</sup>キヤ本<sup>ハシメ</sup>ニ首<sup>ハシメ</sup>第二<sup>ハシメ</sup>結<sup>ハシメ</sup>ハ<sup>ハシメ</sup>此<sup>ハシメ</sup>ニテ  
春<sup>ハシメ</sup>ト定<sup>ハシメ</sup>一<sup>ハシメ</sup>レ<sup>ハシメ</sup>キヤ本<sup>ハシメ</sup>ニ首<sup>ハシメ</sup>第二<sup>ハシメ</sup>結<sup>ハシメ</sup>ハ<sup>ハシメ</sup>此<sup>ハシメ</sup>ニテ

本地燈<sup>ハシメ</sup>綠<sup>ハシメ</sup>也<sup>ハシメ</sup>新<sup>ハシメ</sup>撰<sup>ハシメ</sup>ナリ然<sup>ハシメ</sup>ヒ向<sup>ハシメ</sup>燭<sup>ハシメ</sup>ヲ<sup>ハシメ</sup>叟<sup>ハシメ</sup>ト<sup>ハシメ</sup>變<sup>ハシメ</sup>レ<sup>ハシメ</sup>燭<sup>ハシメ</sup>用<sup>ハシメ</sup>  
冬<sup>ハシメ</sup>ト感<sup>ハシメ</sup>シ今<sup>ハシメ</sup>ノ本地<sup>ハシメ</sup>綠<sup>ハシメ</sup>ヲ<sup>ハシメ</sup>春<sup>ハシメ</sup>ト感<sup>ハシメ</sup>セ<sup>ハシメ</sup>ヘ朝<sup>ハシメ</sup>茶<sup>ハシメ</sup>湯<sup>ハシメ</sup>  
朝<sup>ハシメ</sup>良<sup>ハシメ</sup>ノ例<sup>ハシメ</sup>ヲ假<sup>ハシメ</sup>テ秋<sup>ハシメ</sup>ノ用<sup>ハシメ</sup>ト感<sup>ハシメ</sup>ス<sup>ハシメ</sup>キヤ本<sup>ハシメ</sup>人<sup>ハシメ</sup>ノ家<sup>ハシメ</sup>尋<sup>ハシメ</sup>

○ 花之部

若葉 古事ニ木ノ若葉ハ甘々ト成レニ早ノ若葉ハ春日ト  
ノリ 成レニ青ノ葉ハ總テ賴ト成セルをナリ若ニラ或樹  
ニ花ト若葉ノニ叶ニ若葉ニ花ヲ結テハ春日凡ニ云  
曾氏ニル何故ニ次ナラヌヤ○今按スニ月花ハ凡雅ニ  
一毫ノ飾ナレハ躊躇物ハ加減シテ四季ヲ自由ニ配ニ  
ハ若葉ニ花ヲ結テハ決レテ甘々ト定シ○猶按スニ  
此配ハ花ハ春ナリ葉ハ甘々ナリ宜ハ本ヨリ秋十九ラ  
其ニ葉ニ若ノニ字ヲ結テ若ニ葉ラ甘々ト成セルニリ  
若葉オノ春ナル道理ヲモ知レ然レハ花ハ春甘ニ  
跨テ花ニ郭ムラ結タルトハ入遠タル備ニ等

## ラ加減ノ棲度トハ云一キナリ

残花

此詞ニ古今ノ論アリ然レニ残ノ字ハ其季ヨリ

此季ニ残子六張ト云ル道理ナレ花ハ本ヨリ  
春ニ決シテ残ハ夏ト定シ惣レテ残葉残葉  
ノ類モ古エハ一樣ナフ又故ニ十只八十色ニ貰ニ  
百世ニ論ノ勘レ時ナレ辭言ハ残葉ハ重陽ニ殘ル  
ニ残葉ハ何ニ残ルキヤ残ノ字ハ總テ其季モノ次ニ  
取りテ此論ラ張字ノ例トスレ秋ニ之部ニハ舉ルニ  
牡丹杜若

此ニ名ハ和漢ノ違アリテ詩ニ牡丹ヲ春日ト成  
レ歌ニ杜若ヲ春ト成セレト中古ニ詠諧ノ加減

ヨリニ名ヲ甘ニ用タルニ初夏ニ花ノサナキ故トフ

松竹落葉 古抄ニ松竹ノ落葉ハ賴ナリ常盤木ノ落葉  
松竹落葉 八月ナリト云ヘト松竹ハ何ニ常盤ナラニヤ山館

ノ白情ニ殊ニ面白キ物ナリニ昂ハ決シテ甘夏ト定ムレ  
去レト落ルトハ詩ノ詞ニテ散ルトハ大和ノ凡雅ナリ聲六  
桐葉ノ里ク落テ彼ハ散ル者ニ非ス夏ニ空情ノ論  
知ラハ千未万法モ夏ニ明ナルレ

水墨芙蓉 竹子ハ新撰ナリ 芙蓉ハ和渥氏ニ秋ニ即  
入メレト水墨芙蓉ト云フ時八月六蓮ノ一名下  
ワ然レハ條ニハ和ケテ水墨芙蓉ト續ス氏ナキ合水

ヲ結ルカ敵レト云フ詞ヲ添テハナレテ甘夏ニ用マガリ  
秋ノ芙蓉客ハ陸ニ喰テ凋テ散ニ又物十六ナリ世數  
ヲ句作ノ凡例ト成スキナリ

老堂 竹子ハ全ウ新撰ナリ然レヒ老堂トハ本ヨリ 漢家ノ詩ニ出テ或ハ莊堂氏乱堂氏總字  
夏春ノ物ナレト例ニ今式人加減ヨリ殊堂六句論  
ニテ老堂モ夏ノ名ト成リハ老堂ニ老ノ感情アリ  
曰羅ハ例ノ麻敷味ト云ヒ世名ハ實譏ニ據ルキナリ  
老堂附子 竹子ハ例ノ當用ナリ○今接ニニ老堂子ハ春 莖立テ甘夏銅一ハ六月ノ間ニモヲ替テ冬

至ノ比ニ鳴習フ故ニ宣子ニ鳴字ヲ結テ冬季トハ成セルナリ然レバ夏ハ鳴習ニテ或ハ引鳥子ノ親ニ附ケ或ハ笛ヲ以テ引音ヲ教ヘニ替古ハ夏ノ向ナレハ附子ハ決シテ甘苦トエイ笛ヲ結テモ甘苦ト知ニ日月星日ハト引声ヲ取上ノ聲トセリ

鳴巢 脚注 帝年ニハ鷗ト都鳥トヲ加テ水鳥ハ總テ冬ニナレト  
此ニ鳥ハ歌道ノ御古事ニハ夏ニ記サスト其擣テ例ノ子細モナク新ナリト云々今接スルニ都鳥ハ指テ能詰ノ用ニ非ス増テ御古事ニハス鷗ト云々<sup>ツキホリ</sup>鷗ト云ルハ本ヨリ水鳥ノ用アハ巣ボラ結テハト云々

冥ヌトオヌレ然ニ鳴ノ浮掌ト云ハ古ホニ新ト成セル夏ハ水中ノ芦ニ巢ラ獨メハ水ノ増減浮沉テ四季モ其候ニ捨置ク故ニ道理ヲ附テ新トハ成セト鳥右巢ハ總テ去物ニ其巢ラ掛ル時ハ冥ヌナレハ併掌ハ決シテ冥ヌト定キヤ巢ニ用ナキハ自作ニ依ルニシ鳴ノ別名ハ又ミテ部ニ論アリ

翡翠 脚注 鳥鳥ハ詩ニ名アリテ古物ハ渡鳥ニ入タートヌノ名川ニ木張ラ傳テ決シテ冥ヌト云シ川蟬トハ<sup>倭名</sup>ナリ仲鮑 脚注 竹名ハ俗羽目ナリ或ハ海邊ノ別名トナリ或ハ船遊ノ時ニ魚ノ新敷ヲ称スレハ決シテ極暑ノ名同

ニテ此等ヲ例ノ音韻説ト云キナリ

波  
音  
察スルニ既ニ字ノ惑ニヤ夏ハ涼ヲ好ニ秋ハ冷  
ラ西ム天地自然ノ道理ニシテ此等ハ昔より未  
物ニ古今ノ遠トハ天理ノ次第情ラ論スシテ文字  
言語ノ名ヲ認ル故ナリ是ラ干式ノ凡例ト知ナリ

○ 秋之部

花  
白  
田  
ノ  
理  
屈  
ア  
ト  
此  
分  
ニ  
テ  
四  
直  
カ  
能  
ナ  
ク  
ト  
云  
一  
リ  
如  
何  
ナ  
ル

細古ニヤ知ラス○今梅スルニ花増モ花島モ夫レテ  
秋ニ定キナリ花園ト云ハ竹花ニ似ヌし庄園トハ  
仰向キ白トハ俯向ク复ラ能詮ノ次ケト卒種々  
ノ理屈ハクノ用ニ非ス等ラニキノ有用ト知レ  
桂  
花  
地  
下  
ノ  
桂  
ハ  
花  
ノ  
角  
ナ  
リ  
和  
歌  
ミ  
月  
ノ  
秋  
季  
ト  
定  
ル  
ハ  
勿  
論  
ニ  
テ  
四季ノ詞ラ結フ時ヘキモノ用キナリ然レハ  
育明既望ノ名ニ例レテ日モ星モニ旬モラ植物  
ニモニ旬モキナリ

鳥龍橋 古抄ニ生類ニ非スト、鳩鳴

也詞ハ種々ノ説アリト

如荷、鳥ニ向去<sup>ギ</sup>、鳩鳴キラ吹テ鳩ノ真似也

紅葉散

也詞ハ古字ヨリ日<sup>カツ</sup>散ラ秋トムイ散トハカリラ

花ノ散ルモ春トハ紅葉ヲ散ルモ秋ノ若ナリ増テ

冬散ル木無トムイテ枯テ色ナチラ用トセリ也等

ラ古今ノ用捨ニシテ例ノ目<sup>ミ</sup>ナニ及向敷ナリ

柏散

也柏ハ鶴傘ニ説アリテ論語ノ松柏ラ證文也

又豆蔻ハ新ト成セしニ寔ニ散<sup>シ</sup>守ラ結テハ次メ

秋ト定<sup>キナリ</sup>○今按スルニ論語ノ松柏ハ松ト柏ト

常盤木ニヤ然ルラ六書正説ニ柏字ハ柏字ノ俗書  
ナリトヤ去ル大和ノ俗習ニ柏ラカヤト訓レ柏<sup>カシ</sup>  
ト訓レテ此類ノ正俗ハ教多ナレト知テ誤ニ從フラ  
國内ノ故寔トハ云<sup>リ</sup>モナカラ爾雅ノ註ニ<sup>テ</sup>有<sup>ミ</sup>  
實而如柏トアレハ倭王柏テハ樅字ラモ用ニ樅ト  
柏トハ異字同訓トムシ或ハ鶴傘ノ設ニ<sup>テ</sup>紅葉セヌ  
故ニトムニレト桐<sup>ノ</sup>葉ハ紅葉セ子氏和漢通用ノ秋季  
ナリ物シテ我家ノ百名追ハ柏字俗ニ<sup>テ</sup>二論  
ヨリ古今ノ西用モ正説ノ二様モ能諾ハ例ノ俗習ニ  
從テ今日ノ用ラ産ス<sup>キナリ</sup>

椎檉柏 節傘ノ椎下ニ紅葉ヤ又木ナレモ椎よりヤリモ秋  
ナリ或ハ葉モ此木モ秋ナリト云テ秋ニ用ヒ子細  
ラ叙セス然レハ柏ト入遠テ彼ヲ薪トシ是ラ秋トセ  
百せ念トハ此謂ナリ○今按スルニ椎モ檉モ柏葉ノ  
名類ハ全ク紅葉ノ所也非ス落ルトカ拾フトカ  
宣ラ結テ秋ナル蓮實ラモ夏ナリト云レハ古抄ハ  
如何トモ其故ラ辨ヘス

新薺高麥 此キハ例自實觀ナリ奉何トナレハ別ルハ冬ニシテ食フハ秋ナリ前後ノ働ラ嘗見テナリ去レハ茶キラ摘ムハ春ニシテ新芽ハ順次ニ生ト成セル僅東

ノ用ヲ知ル時ハ孔子ノ宣給フ不時ノ誡モ且ハ時其物  
ノ程ヲ知テ分外ノ至奇ヲ好ホレト

禡鴨 竹名ハ全ク新撰ナリ或ハ貴觀尼加減トモ云ハントニ接スルニ奉膳亦ニモ一鴨ト並ナカラ嘗見スル所ハ秋冬ノ差別アリ去尾見向ノ姿情ナ論セハ初ト云ハル雅ラ因ニ禡鴨ト云ハ风味ヲ思フ多ミラ天眼モ天耳丘云アリ辟言ハ禡カト音ニ喚ハ味ラ先ニ四ツニヤ鴨ノ文ナルハ勿論ミシ禡ト字ラ添テ秋ト成スケン

野宮別

連歌角ニシテ能誦ノ平誦ニ並用ナラン然ニ能誦

ハ下等上達ノ道ナレハ之ニヒ等ノ名ヲ舉テ云家  
歟上ノ例ト度サハニキニ世ノ名ヲ<sup>スケル</sup>來テ俳諧  
曲節ニ用ミトナリまへ野官口ハ達識ト賀茂トニ在リテ  
伴勢ノ齊爾官ニ移リ玉フラ野官ノ別トハスリトフ去ルハ  
羅旗三七哀傳ニモ非ス增テ意無常ニモ非テ哀  
ナル沙店モ多ケレハナリ

## ○冬之部

枯尾花 此名ハ古今ニ論アリテ秋にムイタニムヘト枯尾花ラ  
結木冬ト定シ其故ハ名之木ノ枯ルラ冬ト度レ

殘葉 此オハ諸抄ニ論アリテ佛金三、重陽ニ残リテ秋  
ナリト云一レト桃モ菖蒲モ其類ニ非ス然ルラ和歌  
ノ公ホ二十日五日ラニテ残葉も宣テスレハ宣西季  
ニ及ハス、シテ決シテ冬ト定シ此等ヲ加減ノ用ト云  
ハシ残字ハ總テ残葉ノ例ニ效シ

乍鶴 此キハ全ク當用ナリ古折ニ秋ニレテ眞鳥ノ部  
ミツキノ井ニ入エレト山雀曰少雀ノ類ニハ非ラア乍鶴ノミ  
物ニ連ニス民家ノ軒ニ馴テ虫防ラ傳ニ半禰ニ

避ニキ声ノ清ニタルハ殊更ニ寒ニ増テ春帰ル次モ  
王是モハ次レテ冬モト定シサミラ姿を惜メ御トモシ

## 木兔

ミツク木兔モ例ノ新撰ナリ古抄ハ秋ノ部ニ入タレト候  
三モ非ス色官ニモ非ス増テ鳴声ノ物騒<sup>ハシキ</sup>ハ寒<sup>ヒリ</sup>ト廣

一モ故ニトヤ然テニ季ノ加減トニイ夜<sup>フタタガ</sup>鳴ク夏ノ當用ト  
ムイ決シテ冬モ定シ或ハ鳥モ部類ナカラ新ト成セル

ニ用アリテ世等ハ古抄ノ文量ト称スレ

## 鶴

此鳥ハ倭名ノ火燒ナリ然ル古抄ニハ渡鳥ノ部ニ入キ  
ト其名モ直吉ノモ朝霜ノニ氣色ト云イ秋ニ小雀  
ノ多シシハ文ニ之部ニ跨<sup>フ</sup>テ名モ加減ト云キナリ

## 鳩

此鳥モ論セハ新撰ナリ清寧ニ鷺下<sup>ハ</sup>鷺ト都鳥トヲ  
加エテ新式ニ雜ト云ル歌道ノ秘古又ナリトモ四捨テ例ニ  
其故ラ曉サ子ハ今日ノ用ニ立雜レ○人<sup>ハ</sup>梅スルニ路鳥モ蹲  
モ次ニ廿夏冬モ差別モ無レハ早ホラ結スハ雜トモ云ケ  
レト鳩ハ鳴声モ寒ニ氣<sup>ミ</sup>俗語ニ接<sup>ハシケ</sup>井<sup>ハシケ</sup>云フナレ  
ハ能詣ニ名目ノ自在ラ称レテ冬ニ用アラハ冬ニ  
用<sup>ハ</sup>キヤ然ラハ聲鶴ノ部類ニ勝リテ例ノ雜トモ  
季子ト成リテ附合<sup>ハシケ</sup>口<sup>ハシケ</sup>用ト云キナリ

## 鳩子

此名ハ古抄ニリ號<sup>ハシケ</sup>字ラ結テ冬モト成セシトモ  
鳩子トハ名目モ長ケレハ啼<sup>ハシケ</sup>字ナクモ冬モ定

レ彼ハ冬至ノニヨリ鳴習フ故ニ其ニ冬ニ用レ  
ハナリ増テ草ノノ世鳴ト云ハ子ニモ及向敷  
ナリ  
**尾越鴨** 犬名ハ俗習ナリ鴨ハ往來ノ道ヲ定テ山尾崎  
ヲ越ル故ニトワ然ヒハ初鴨ヲ秋ト度シ鴨ト  
ラ冬ト度セル名ハ殊ニ能詣ノ用トスレ

**綿入棉打** 古抄ニ綿を夏ハ分明ナラス或ハ真綿モ木棉モ  
總テ冬ナリトムレト去ルヘ附合ロノ害ロアラン綿  
ノ本ヨリ新ニレテ綿入ト綿抜ノ對レハ入二字ヲ添テハ  
冬ト定一レ或ハ棉ヰラ秋ト云レト綿ヲハ摘ト云イ  
棉ヲハ打ト云フヰハ木棉ニレテ次レテ冬ト定一レ

棉取新棉ノ外ハ秋ニ非入或ハ綿帽子ハ衣類ニ  
非スト云イ綿ニ海鼠腸ウツノウツノ類ハ古ニ遙  
ナレハ論ニカヌハス然ニラ綿ト木棉トハ附テモ苦  
カラスト云テ既綿ト木棉トノ紙文アレト綿ト掃  
トハ量堅也ニテ音訓正替日ラヌラ何故ニ附向ラ  
婦又ヤ古抄ニハ世教アリテ皆々論スルニ暇アラス  
夏ニ成綿ノ一名ヲ舉テ一カは尤例ト成サハ其ノ外ハ  
推レテ知キ矣ナリ

**サ路塔** 仙名ハ古來ヨリ論アリテ歎冬ハ山路ニ  
充丸タレト和歌ノ題ニハ山吹ニ用事木々ハ頃

テ大和ノ故宣トハ成レリ然レハ中古ノ式目六路譜  
モ路花モ同ク春ニ用タレト此名ハ例ノ音異發唱リ  
村脩ノ雪ニ結トモ路塔ハ冬ト定シ然フトモ  
薦花ハ漫ニ霞鳴カ春雪ノ詩ヨリ春日ト云ハシ  
モ宣ナレト其名ハ指テ能詔ノ角ナシサ路セオハ祖  
春ニシテ一物ニ用ノ例ト云キナリ

冬丸 竹名ハ能詔ノ自在ニシテ冬ト音ニ喰ニ或ハ  
カモフリト訓ニ喰テ中古ハ總テ秋季子ト成セリ  
去レト辛ニ冬ノニニヨリ霜ヲ待テ賞スル物ナレハ  
西化ヲ秋トセル加減ヨリ冬丸ヲ冬ト定シナリ

雪海 竹名ハ俗習ニシテ或ハ加減ト云キナリ竹物ハ  
北越ノ名産ニシテ海邊ノ岩面ニ降積文  
ル雪ヲ波ノキ浸入柏子ニテ凝テ海云口トハ成レリ  
トヲ然ルニ雪ヲ里下訓セシハキラ青ト云ヘル美訓  
ナラシニシテ冬ト成サハ例ノ寃議ニ及ハスシテ  
雪海 竹口ヲ以テ冬ト成サハ例ノ寃議ニ及ハスシテ  
竹等ラ加減ノ當用ト云一レ

大根引 竹詞ハ冬を當用ナリ大根ト略シテ音詔ニ  
讀ヘシ京家承ノ大根引ニ效ク 大根引ニ效ク カラス牛房  
モ同レ名數ナカラ引ト云ハスシテ壠ト云フ其ハ名

ハ秋ト知一キナリ〇今接スルニ作譜ノ式同ハ新式ニ據  
ラス古抄ラニ述バス今日ノ書法ニ遠子ハ其ニ座ニ置ミ  
其時ニ從ヒ其故ラ諭レ其海ヲ朝メテ自己  
ノ理屈ラニキサラシハ其ノ町ラ一世ノ血ツコニ議ト知リ  
其ノ町ラ百世ノ明監ト知一キナリ

車大ヒ云け式の迄用ヒ始ヨ節の食の式より  
終ヨ大根引の俗習ナリおよびにナ余條ア  
フ或ハ連音の有用ナリ詠譜の式用辛  
一或ハ古今の連用とテトウリ或ハキヌ節の  
加減ととあよ半音をけホナリ千式

万法の凡例ナリシテモアホを滑稽首の微中  
キ失ソモ一舉万通の様ナリトキホの序詞  
ヨシヨリヨリ達の人とえソヒテモナリく四事の  
名れとあハシムと詠譜の誤不誤ナ作譜の  
用ナリ用ナシムナリケホと格別ナリ自己の名  
とひうきんとて瓦マの意ヒトシヒタル

○ 作譜ノ假名はシハ事

大和ノ假名遣ヒテヨリ定承ヒの如教者  
テヒ代もヒテハ既ナシモトキ書ト紹巴の

字がある。天文の時代扱りありとせむると  
せくまつしまなつて或も放寔さすわあつて志わ  
トもととせとまく機字とまくもてわの假名  
ある。二庵、すすり類字すら音とぞねれに訓へ  
やのまやあんじ何故よ捨れへあすませ告  
ち々やます書ふるをきくいかゞくあくわ月くと  
難書のね叔高うて例めにむかひあくわ寔  
トや転うにはづくよねあうて字とへあくと  
くふくみことまく法とくはとくいハホハギ  
トう通音う入音一ちとまく風うふのまくわハ

ち。すまむ。よしむち一ノれとち。トシト物の名  
トも。すまと詫みやウキあれくよぬくよ。もく  
マセとさ假名の圓字とも。キヤヒヤヒト  
テ。ふの転車うておとこと口傳とくふらう。トシト  
假名遣の草意と書法の字形と音韵の転車  
とけも用ふるまれひも余とけ例ふ考。知一  
但ア。假名の転車ととと転車と白。圓と野  
重と黑。角と鷹。トス。二様と平仄の相続也。今接  
もうに假名の書法へ連能ひまくいあく。連書  
ハ假名からに能滑と真名かくもあれハ假名と

真名とせ記をもぞまにうふのらるあり一章と  
へあつてさもじせとせとき假名ハやよりセテ字をれ  
とゆふと假名書の假名とくろやうと書は  
の字は形がとけられんあは。よましよ。とち三ノセ  
室トヨシヤアヒトとけかく一室よまし例の  
ぬあるよ紙としれり假名ハ便きをす。が室  
の口授と様。知一きや或と文句とづるやうと  
カーテル能。よまとへ信てこら一或と言語とゆよ  
アトカーテル能。トヨシ編ナシ。トアリとあす  
の信編ナシ。かうけあれまをまをすすのくわう

字形のくわうと考一ト迄もるあら文うと言語と  
に同訓異用の假名遣あうて且と用ひ中と朝  
トヨモルをとああいわはもな假名遣のあうあ  
いいふいれとやはえ一づのれすアリトモと  
新制のうるせやアリト假名ほほいのゆ法のくわ  
とあんのをやあまくおもちう一あうあへそ文  
の能力あくしよ已うもと耻もアリ人のみう教  
例の明筆コトカムモ一きよせやわらハ二事のほ  
コトあるまをむき一まづは

## 鯉 鯉類

いまく  
いふ一

畠

さかうるへ器の附也

紅

くまみ

佐古

さきすむと

あ

ら不勤也

眠

ねむりもと書也

侍

さむべひ

〇〇〇〇 い

いふい

夙

さつまく

け

れを放棄也

い

れを放棄也

東芳

とうほうよひの報をすとまくと

いふ

の二用

よ運ひそひとよ。よ面おなせちかく  
 音面もひあへて唇の一音よ面へと、  
 くと喉元の二音よ通ひ或と口鼻や空へ  
 と手と齒音のを連れてアキレキの様  
 実をうちもがキクチの壁もし定まつて  
 えれも大和の国曲りてトセ字よ解  
 きよ助教みゆくあれど我のみの音律  
 わゆ店とせどひ道もむら指名もあれを  
 和訓よくまきと耻じるよ一△角機も右  
 にひじとひくのとく鰐と葵せきる

とすと假名より又句と言語とに動く  
動くを詠あつて物名をまんまと動か  
へ鯛蟹のあたひの字やまうるを參詠の  
れすおもいく物名あれども假名よりを  
次をちとづにあつて奏をあふいどち  
まとあまきり日記とぞくるぬよ。いと  
辰巳の物とあらう難いのみかの假名  
あれといふ。を音寫の次もあらう假名  
改むとを歌盡す。す。第。とおもられせ  
みゆゑと古事記中あるとあたしわざの

れもかうのがくをじて假名をかく  
動くをばがともあふあれと言語を動か  
えくをかくをとくとくとくとくとくとく  
のこもくとくとくとくとくとくとくとくとく  
の下の五品六下書の假名はまくと散在れ  
はまくとおもくとくとくとくとくとくとくとく  
と動くとおもくとくとくとくとくとくとくとく  
と上中下用ると或も畜生と畜生と畜生と  
或も口傳と放棄とせまされに假名はまく

の主と竟を和歌の撰集も武家家の軍書  
も假名と真名とぞ多くなり假名  
はくじとオードてよすると其書の用  
あれハヤ一ゆるも一書やまかんふあり  
まろと今たまめあくと万葉假名と  
かまくへうりひくあくと真名と「す」ね  
ヌーナニナエトと、われへあとえのをだ  
とまふぬて風雅と此声の感仰あれ  
ハ今きりわく、洞し、わざれども  
さむと能書の家よまく、屏风障子

の風流すすみとおのとく「よもや」而に  
詠うるの聲と撰集「アラシ」くまに書  
せむ佐治と屏风よるまくね也詳しけれ  
の叶啼ある。圓角の二紋よ軽重とモア  
むれとすえとすけ角とあまくがよじかと  
せくよひやまなとお月くと多岐の  
まといあんちれハ再撰の聲とアハ假名  
ハもれと用ひよ一發石中の的語と焉也  
○不直ふとま林とももい

車を云ひてよき序詞であつて、機車を  
も含んでゐる。運営もあつて、輸送もねる  
ものが主である。機車は、車輪の回転を、車い  
の走行へうながす。あるところでは、車を  
走らしめて、車輪を走らしめることより、  
車と車を組合せた車の運営と車の再操縦を  
も行つてゐる。車の運営と車の再操縦を  
車と車を組合せた車の運営といふ。車の運営と  
車の再操縦を車と車を組合せた車の運営といふ。  
○ れ  
男車二トは號號 捕捕 車車 大お尾大お尾

女車二トは號號 小捕小捕 小と緒緒 と  
車を云ひてよき序詞であつて、車の運営といふに  
のど。とよからんと音のと音のと音のと音の

善ふべからずと東洋の詞のうちであつて、  
詠歌のまゝへあらへそりや思含思含 ひまふく  
フ電車電車 を以て通用せ

○ わ  
かと仰上と下と仰仰 之輪之輪 けれひ又角又角  
は、仰中と下と仰仰 之輪之輪 みまとさ

車を云ひて角機車といふ。機車のうちの車で、  
車と上下する車へ。車と中下する車へ。車へ  
はと車の車をねどりもうちまどりまどり  
まどり上下する車へ。車をねどり下する車へ  
が、車をねどりみどりみどりみどりみどり

と中下に用ひたり。そのまゝ中上用ひ  
ゆうぢあらかとある。それわれもあらか  
とと書て書ひかへばよ。餘を餘名  
そぞり或ひするらむるのれもまよ。す。  
づのふと用ひし事とアレ。す。とよ  
あらかと申たとも字形ヨリ。それ  
と書ほめくもりす。假名のほくどす  
すあれひがふとけ例よも。一。られとよ  
すたの假名ほくどす。處よは汰さハ。要あは  
録く。われとひうちねども知る。引

○え

消キタル杖木觀札山里のねえの手本  
キタル杖木山里の手本の葉と口也  
更カル言ふや葉と口也

○へ

戸コ卫指<sup>ス</sup>ミ<sup>ス</sup>モ或<sup>ス</sup>ホ<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>す。アト  
車<sup>ス</sup>モ<sup>ス</sup>モの手をむすり<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>詰<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>ほ<sup>ス</sup>

や分ぬか<sup>ス</sup>き<sup>ス</sup>用<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>編<sup>ス</sup>え<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>詰<sup>ス</sup>え  
と<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>や<sup>ス</sup>い<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>詰<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>て  
二音車<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>也<sup>ス</sup>編<sup>ス</sup>え<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>也<sup>ス</sup>字<sup>ス</sup>也<sup>ス</sup>  
と<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>詰<sup>ス</sup>え<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>也<sup>ス</sup>詰<sup>ス</sup>也<sup>ス</sup>車<sup>ス</sup>也<sup>ス</sup>  
と<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>名<sup>ス</sup>也<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>詰<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>實<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>也<sup>ス</sup>

或とえのすと見かねまて 諸君モロコシかえりよ  
あうとつよ設ハセタと見えのすとえと訓  
きよとあひゆびの御モロコシを御モロコシと  
言ひるが一むかづり伴是は津ツエメにす  
の能ハセタとつよアサヒの御モロコシと

〇〇〇  
つ ち そちよ。 づく。 みかせまや

医師 ハツレヤリムニ付也 鞍挂ツバキ拾レツフ  
車苔カマシを云假名ハシナハ五條ウチイのおれオレも  
あら、ふも下シテの五條ウチイはすに彼カミよ給已

の足アシとまくらて常用の假名ハシナと増補に  
うおきりハシナ再撰ハシナめやせりハシナしき  
されやまの假名遣ハシナシとすら候ハシナ人ヒト  
作ハシナてはらの迷ハシナあへどハシナはれ傳ハシナ  
伊那ハシナの名ハシナとすら開ハシナと補ハシナと行ハシナの  
ほやまくて自己の眼ハシナとすらまくハシナ傳ハシナ  
れすが誰ハシナとすら取ハシナとすら傳ハシナとすら  
とすらハシナ各ハシナわざまんハシナ端ハシナとすら  
あくびハシナの假名ハシナはくじハシナとすらとすら  
あくべハシナとすら高ハシナの假名ハシナとすらとすら

蓮ニ云せし假名はひらすよありて方言  
ほくいとすよすくはりかく教行の新韻表も  
じよと假名真名せんぢうすて文和詞  
助語とやうけて能谱の文章せんに假名  
あそりまくいへ三段もんじけ溫鶴を称す庵  
の遺稿（トトロテ）假りて假りて五种の一筆をむく  
え様甲成の私（モミツ）や伊賀北西聲庵よりすて  
後様裏の撰集（シラフ）の序文にとまつたなめ文  
稿（トトロテ）ととくりて、す筆端の正稿あるに  
前様裏の真名文より幻住庵記（トトロテ）

魏志に楚の文論ありて王略云我が前て俳諧  
の文章と和歌蓮亭と称ありて家ヨ一格  
あんすとるふと漫とて四六の文にありて拾子  
いはよ隋詩あんとれの能谱の平詠あり  
例の真名からあんすとまとへひ比類也  
形容より上と鰐鱉（トトロ）の羽の如く下と鑄錦（トトキナ）の股  
と似て其の跡の原由株のの難ある詞も  
似て似てあれど今れ文論よ真名ふと  
返る返るねの差よあれひきとひせぬの相

ありとて假名とまで直名と呼んでゐる  
大和の文とつても今論まる幻住庵の記も古書  
の説をかりてかゝる様文に起る事よりは其の  
足が東南と見て可いの用とはさへ  
云々是れ桂定の手よりて筆の筆跡に指とせざと  
云はまでもこれと云ふ所の筆跡に指とせざと  
云はまでもこれと云ふ所の筆跡に指とせざと  
人れ極めてひどや奥のあたりをきのやくまで  
人をきかれてゆる蹟と見とせざるあるあれ  
今す假名直名の筆跡よりておよろせておもへ  
を一万尋家の假名からよへうもと我とすよ

がまほそとけたりとすと拵ふとくもよ  
あととと雖皮のりと筋とひと並換と一ノ漢  
ト詩文の文章と論とく湘南と月日と  
とほえて百姓の文様より取ふとくと  
またかくの遺稿のたゞちるこれらと又秋の  
御訓とよ今一とくやけ稿のあすくあらむ  
年とせ十月と祖義ハ難波とて坐と歸一  
度の武陵と伊豆と一とくとくとよもむちの  
すちとよ海ねとよとととととととととととと

の古をめぐらすあまくさの件おひたのとく  
例のるじあわうすとよきうちと薦柿さんと  
ゆくへまくせむくに書林よりうすくうじゆ  
すとし傷仰の遺書うすあうてその所とたの  
はとじくここのやみとほの奥、席とはくと  
遺稿と行下せ密護あんとやまつるくの  
度狭とゆかへ仰詔と十大才子の接書うり  
ひろきう傳書とすすんでの編室とせらする  
と金と貴書の虚室あんじ例のおもて  
おそれまことうなれど同の角撰うすと接へ

あて案議とまともんじやへ行役まことに假名  
はくひよと和漢の助詔を通用とみてて假名  
と真名とせんじうとて彼つす見聞賦と文  
格とすまくひよ大和韻と助詔とすまくせ

